



TITLE:

百姓一揆論に關し土屋喬雄氏に答
ふ

AUTHOR(S):

黒正, 巖

CITATION:

黒正, 巖. 百姓一揆論に關し土屋喬雄氏に答ふ. 經濟論叢 1931, 32(4):
744-752

ISSUE DATE:

1931-04-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/130012>

RIGHT:

大正四年六月二十一日第三種郵便物認可 (毎月一回一日發行)

(禁 轉 載)

東京帝國大學經濟學會 經濟論叢

第三十二卷 第四號

昭和六年四月一日發行

論 叢

地方人税の課税方法 法學博士 神戸 正雄
ディルタイ哲學と經濟哲學 經濟學博士 石川 興二
數學的經濟學の論理的構造の批判 文學博士 米田庄太郎
利子の形成について 文學博士 高田 保馬

説 苑

米の生産と消費の分離 經濟學士 谷口 吉彦
農業恐慌 經濟學士 八木芳之助
獨逸中工業金融機關としてのIndustrieschaft 經濟學士 楠見 一正

雜 錄

測るべき大量 經濟學士 蜷川 虎三
生計費指數に就て 經濟學士 益田 熊雄
百姓一揆論に關し土屋喬雄氏に答ふ 經濟學博士 黒 正 巖

附 錄

新着外國經濟雜誌主要論題

百姓一揆論に關し

土屋喬雄氏に答ふ

黒 正 巖

一

私は先きに先學小野武夫博士と徳川時代の百姓一揆の革命性の有無に關し數次の論争を試み、又他の學者にして論戰の渦中に投ぜられた向もある。殊に自稱マルキシズムの立場にある人々は、夫々機關雜誌を通して極端なる論難を加へられた。小野博士の所論は事實に立脚する有力なるものであつて傾聴すべきもの頗る多く、余をして深く反省せしめ研究の不備を是正し得た所は甚大である。併し學問上の論戰とても回を重ねる事餘りに屢々なれば、その勢の極まる所、往々にして枝葉末節に走り、論議の本筋をはなれ、

稍々もすれば感情論に墮するの危険ある事は、過去の論戰史に於て殆ど例外なく見出しうる所である。之れ以上の論戰を繼續する爲めには、小野博士との一騎打は不都合を生じ易い。こゝに於て私は遺憾乍ら百姓一揆の革命性に關する問題は未決のまゝとして議論を中止したのである。併し乍ら之は私の卑怯と眞理探究に對する不忠實とによるのではない事を斷つておき度い。

徳川時代の百姓一揆の革命性に關する議論を續行せんとすれば、徳川時代に於ける百姓一揆の史實を更に一層正確に探究する事は勿論、徳川時代に前の農民騷擾井に明治維新後の農民騷擾に關する研究によつて傍證するの必要がある。私は論戰を中止したが、今日尙ほ力の及ぶ限りに於て之等の資料の蒐集に努力しつゝあつた。

然るに先年ある機會に大藏省屬高橋俊氏と共に、内閣記録課井に内閣文庫を訪ね、その秘藏にかゝる太政類典井に修史局編纂府縣史を披見したるに、計らずも明治初年の百姓一揆に關する資料の豊富に收録せられて居るのを發見した。之は未だこの方面の研究者も充分閱讀利用せられなかつたように思はれたので、早速之が筆寫を願ひ出で、最近その大半を手にする事が出來た。その間に外國留學より歸朝せられた東京帝大助教土屋喬雄氏は人を介して右の資料を同じく筆寫し初められた事を聞き、恐らく之を基礎として明治初年の百姓一揆に關する大研究をなし、世に公表

百姓一揆論に關し土屋喬雄氏に答ふ

せらるゝものであらうと心ひそかに樂しみ待つ待ちあぐんで居た。果して明治初年農民騷擾の種々相併せて黒正博士の百姓一揆觀を批判す」と題する論文が中央公論誌三月號に發表せられた。同誌發賣の當時、恰も私は水戸地方に旅行中であつたが、新聞紙の廣告には「京大黒正博士に對する手擲彈」とか、「黒正博士を論難して痛烈」とかの小見出しがついて居るので、取りあえず書肆に趣いて一本を購入し、閱讀數次に及んだ。土屋氏は紙數の制限があり、然かも資料を豊富に有せらるゝに拘はらず、頗る多くの頁數を割いて私の拙き議論に批判を加へられた事を私は深く感謝せざるを得ぬ。

二

土屋氏の批評は一般的に亘るものでなく、從て百姓一揆の本質如何に關する質問でもなく、又土屋氏自身の見解を開陳して居られないから、土屋氏の所論の順序に從てお答へしようと思ふ。

先づ第一には、拙稿「明治初年の百姓一揆」中に於て「當時の支配階級であつた武士の統制組織又は武士を中心とする文化の變遷の方面からの研究によつて封建社會の崩壞過程を明かにせんとしたものが多いが、

何故に崩壊せざるを得なかつたかといふ内面的因果關係又は社會的必然につきては、概ね皮相的觀察を下して居るにすぎぬ」と論じたるに對し、土屋氏は之を以て漫罵なりとし、然かも土屋氏自身を目したものであらうと解し、更にこの詞の裏には私が「深刻なる觀察者」であるとの自負がひそむとなして居らるゝ。土屋氏が右の如く解せらるゝのは、私の言ひ表はし方の拙劣であつた事にもよるが、併し土屋氏が何故にかくまでも裏の裏を見すかしたように議論せらるゝのか不思議に耐えぬ。私のいはんとした所は、正に土屋氏の常に主張せらるゝが如き、一の支配社會の上部構造のみの研究では不充分であつて——勿論、無用とか、効果がないとか、意味がないとかいふのではない——下部構造の研究又は支配階級と被支配階級との對立抗爭關係を見る事によつて、一層統一的に且つ深刻に社會の推移の過程を理觀する事が出來るといふに止る。而して私が「自負するに拘はらず、皮相的觀察者なる事を自ら暴露」して居るといひ、「身分と階級との解釋が不明確

であつて、武士階級は農民を政治的に支配したのみで經濟的には之を支配しなかつた」と、余が考へて居るものゝ如く説いてある。併し乍ら身分と階級の關係は社會史上、いふ迄もなく最も重要にして且つ困難なる問題である。土屋氏の信奉せらるゝマルキシズムの諸書に於ても果して明確に論じつくされて居るであらうか。又その解釋が絶對的基礎を有するであらうか、之が已に問題である。封建社會と今日の資本主義社會との根本的區別は、身分的支配と階級的支配とに求めざるを得ない。たとひ身分的支配が經濟的基礎に立つとしても、身分あるが故に封建社會獨特の支配關係を生ずるのであつて、身分的支配が社會組織の根本的基礎でなければ封建社會は存立し得ない。さればこそ中期以後に於て經濟階級的支配の勃興し初めて、武士の身分的支配力が衰退し、ブルジョア社會へと變質して行つたのではないか。土屋氏は、身分的政治的支配と經濟的支配とが、舊時に於て丁度日蝕の如く重り合つて居るのを見て、日と月とが全然別個のものである事を

無視し之を引きはなさずに一緒に取り扱ひ、黒い丸いものが空中に新に出て來たように考へらるゝのではないか。支配社會である限り經濟的支配の伴はないものはない。如何なる時代にも共通なるものを以て來ては、社會組織の區別の標準となし得ないではないか。若し余の身分と階級との區別に關する批判を下さんとするならば、拙著「百姓一揆の研究」によられ度いし、又「皮相的觀察者なり」と漫罵せらるゝ前に、土屋氏自身が階級と身分に關して確乎たる意見を開陳せらるべきであらう。單に私の見解が怪しいといふ丈けでは學問的議論になり得ない。

三

次に素因、動因に對する批判を見る。社會は色々の形態をもつて居るが、それは何れも獨特の存在、個性を有する。換言すれば一定の素質を有するのであつて恰も各個人が一般的普遍性を有すると同時に、個人として存する限り特殊的個性を有し、素質が異るのと同じである。余は、明治の初年に於て多くの百姓一揆の

百姓一揆論に關し土屋喬雄氏に答ふ

發生したる理由を、當時の社會素質の特殊性に求め、その特殊的素質の成因として、(一)社會變革による人心の不安動搖、(二)農民の頑冥無智、(三)新政府の統制力の薄弱、(四)懷古的精神の擡頭、(五)離祿武士の不平の五點を指摘した。然るに土屋氏は、因果性——その意味はよく分らぬが——の問題を今少しく嚴密に考へようとしてか故に不満足である旨を述べ、余の五素因の説明に矛盾ありといふ。併し乍ら拙稿に於て豫めこゝとわつておいたように、便宜上機械的に素因を分解したにすぎない。從て「離祿武士が百姓一揆を煽動するような事は比較的に少かつた」といつても、離祿武士の不平が存在した事は事實であり、然かも三百萬人からの侍階級に屬する人々の不平が鬱勃として居た事は明治初年の社會を特徴づけるものである事は否定出來ない。この事實丈けを抽出して個別的に考へれば或は百姓一揆發生の素因とは見られないかも知れぬが、當時の種々の社會關係と聯關して見れば、之が百姓一揆の頻發の素因を有して居る事は争はれない。又「明治

十年以後、一揆の減少したるは新政府が確立せられ、その統制力が強大となつた、めではない」といふ所説の矛盾を指摘してあるが、之も前説と同じく政府の統制力の強弱のみで意味があるのではなく、如何に統制力が強大でも、他の素因との複合關係如何によつて、矢張り一揆は起り得る。余が右の五素因を機械的に分析したのは便宜上の都合であつて、右の五素因は有機的に一體として聯關して居る。而して余は土屋氏の如く五素因が必しも相互に因果關係にありとするのではない。明治十年以後に一揆が少くなつたのは、新政府の統制力の絶大となつた、めではないといふも、決して矛盾ではない。

更に人心の不安動搖を以て一素因とするの不可を説いてあるが、當時の如き文化の發達狀態に於ては、急激なる變革による人心の不安動搖は頗る甚しいものであつて、それに關する事實につきては茲に例證する迄もなく、土屋氏の夙に了知せらるゝ所である。この人心の不安動搖が他の素因と結合して百姓一揆を誘發す

るの素因をなす事は明かであると思ふ。余は大正十二年の東京大震災を経験しないから明確には斷言出來ないが、當時の人心動搖が如何に兇暴なる行動を文化人にも行はしめたが、この一事によつても推察に難くあるまい。そしてこの人心の不安動搖は凡べての階級に共通の問題である。土屋氏は「離祿武士の不平」を一素因として列擧する程なら、神官僧侶、商工民、農民、武士等によつて一揆に對する關係が異なる筈だと非難せらる。併し社會全體として見る以上、かゝる區別の必要はない。大震災の時に東京人は何れも不安に陥つた而て成程、金持と貧乏人、智識のあるものと無智の者との間には不安動搖に差異はあるにしても、當時の兇暴なる活動を見るに方りて、之を區別するの必要があるか。明治初年の人口の多數を占むる農民が、社會全體の動搖によつて一揆を起し易いことを示すにすぎぬ。離祿武士の不平と社會全體の人心の不安動搖とは性質が全く異なる。土屋氏は不安動搖は一揆の前行過程であるといひ、之を水の沸騰にたとへ、余は水の温度

の昂るのを沸騰の原因として居ると、氏は斷じた。之は事實を誣ふるもので、人心の不安動搖といふのは現存の事實である。決して過程ではない。即ち土屋氏の例を援用すれば、水が正に沸騰せんとする間髪を容れない温度にある事を意味する。従て石炭の火でも、炭火でもなんでもよい、之に僅少の熱度による刺戟を與ふれば沸騰するの狀態にある事を示さんとするのである。

四

當時農民が頑冥無智であつた事は、恐らく土屋氏も否定されないであらう。現に氏は、所論の第三項に於て、統一國家の形成に反抗するかの如き舊知事引留、信教自由に反對するかの如き佛教の擁護、舊租法の廢止反對、徳川家復興の一揆の存する事を認めらるゝのみならず、血税の誤解、電信その他の外國より新に輸入せられたる機械設置の反對、種痘を恐怖したり、戸籍制度や學校設立に反對して起つた百姓一揆の頗る多き事實を見れば、當時の人々が頑冥にして事理を正解

百姓一揆論に關し土屋喬雄氏に答ふ

しなかつた事は斷じて争はれない事實である。かるが故に種々の直接的動因の加はつた時に百姓一揆なる暴動的形態を以て反抗運動が起つたのである。勿論當時としては壓迫せられたる農民は、自己の主張を到達し精神的經濟的苦痛を脱却せんとするも、合法的手段による事は困難であり又合法的手段を知らなかつた。一揆は、土屋氏も認めらるゝ如く、多くは線香花火式のものに了り、多くの犠牲を拂ひ、然かも必しも所期の目的を達成しては居らぬが、繰り返へして一揆を起したのは、何と考へても事理を解した賢明なる抵抗形態であるとはいへぬ。余が百姓一揆を百姓の頑冥無智に詮じつめつゝ、經濟的財政的動因を説いた事を以て矛盾なりとせらるゝも、之には矛盾はない。實は土屋氏は素因論と動因論とを混同して居らるゝのではない。十年以後、一揆の少くなつた理由として、動因の方面より、不換紙幣の濫發に伴ふ米價の暴騰、作柄の良好、農民の租税負擔の輕減等により農民の不平の原因の消失せる事を示したるに對し、それと農民の頑冥

無智との關係を難詰せらるゝも、之は自ら別問題である。右の如き動因がなければ、如何に無智の農民でも暴動の一揆を起す筈はなく、又かゝる動因があつても頑冥無智でなければ一揆の形を以て反抗しないであらう。故に明治初年の百姓一揆を素因論的に考へる時は之を農民の頑冥無智に詮じつめても敢えて不當ではない。土屋氏は若し頑冥無智を素因として考へるならば、十年以後、一揆の少くなつたのは、數百年間封建的壓迫下に無智となつて居たものが數年間に教化されたといふ事に詮じつめらるゝといふも、之は「逆も亦眞なり」との理窟を以て論ずるものであつて、かゝる詭辯は恐らく歴史論には許されないであらう。一步をゆづつて之を許すとせば、余はイエスと答へてもよいと思ふ。小野博士も嘗つて論ぜられたように、十年以後に於ては農民がその利益を主張する爲めに、非合法の暴動の一揆を止めて、合法的理論的に戦はんとするの意圖か民權運動の形をとつて現はれたのだと論ぜらる。^{*}勿論この點は尙ほ研究の餘地あるにしても、十年

間の解放と訓練とは、暴動の一揆の愚なる事を教へ、農民の蒙を啓き、合理的考へ方をなすに至つた事は明かである。更に土屋氏は騷擾の素因として頑冥無智を擧げる時は、明治初年に起つた舊侍階級の騷擾を如何に見るか、即ち舊侍階級は當時に於ける最高有識分子であつたが、この騷擾をも、頑冥無智に詮じつめると論難せらる。併し、余が本誌前號に於て土屋氏の批判の出づる事を豫期せずして發表したる拙稿に於て明かなるが如く、舊侍階級の騷擾には百姓一揆のものは極めて少い事實によつて、矢張り武士階級は百姓の如く盲目的に騷擾したのでない事が明かである。一揆的に暴動したものがあつてもかまはぬ、何となれば、當時、侍階級が他の階級に對しては比較的高級の知識階級であつたにしても、地方によつて賢愚の差は大であり、客觀的に見て必しも頑冥無智でなかつたとも云へまい。

最後に懷古的精神の擡頭に對する非難である。經濟的苦痛、精神的不安の大なる場合には、過去を憧憬し

^{*} 小野武夫氏、明治維新と農民階級の革命思想(社會學雜誌六三號)

之に執着心を生ずるは人の世の常である。従て之は一般的事實であつて、必しも當時の社會のみに特有ではないかも知れぬ。併し乍らかゝる懷古的精神が社會に漲る場合は如何なる時代、社會にも存するのではない急激なる社會的變革を來し、民衆がその歸趨を失つた時に之を顯著に見るのである。土屋氏は「何故に懷古的、反動的目標をも掲げて反抗しなければならなかつたかを、彼等の社會的地位及び當時の社會情勢の分析によつて究明する事に在らねばならぬ」といはるゝも之は一揆の目標又は動因と、余の所謂素因とを混同して議論せられたものであらう。

土屋氏は、常に本質とか、必然性とかを筆にせらるゝが、我々は一定の社會に於ける諸種の現象を見る場合には、その社會の本質、素質の構成を分析せざるを得ない。只漫然と全體を把握するといつても、それは哲學的には可能かも知れぬが、今日の科學に於ては不可能の事である。然かも前述の如く之が分析は機械的ならざるを得ないのであつて、一應之を機械的に分析

百姓一揆論に關し土屋喬雄氏に答ふ

し、更に之を相互に有機的に聯關せしめて考察するの外はない。かゝる方法による分析を不可とし、又分析せられたる個々の要因を別々に批判して、ふはくした捉へ所のないものとし、素因動因の分析、その結果の列舉綜合を以て、無用の業となすのであれば、即ち止む。も早議論の餘地はないのである。土屋氏は「セルビヤ青年の一彈や當時の歐洲社會に於ける諸方面の兆候を竝べたてゝる事によつて、歐洲大戰の本質や歴史的必然性を説明出來ない」といはるゝも、之は事物の混同である。セルビヤ青年の一彈の歴史的必然性を考へるものは恐らく一人もあるまい。併し當時の歐洲社會に於ける諸方面の兆候を分析綜合する事は、世界大戰の本質、その歴史的必然性を知るに最も必要な事である。土屋氏は、然らば何によつてその本質を把握せんとせらるゝか、事實を了解する事なくして、自身一己の觀念を想定して概念論を試み、歴史學の能事了はれりとせらるゝのであらうか。

五

要するに土屋氏の批判は單なる批判であり、説教であつて、余の愚鈍を以てしては、何を主張せらるゝかを理解する事が出来ない。従て充分なるお答をする事の出来ぬ事を遺憾とする、尤も恐らく批判の中心は素因の分析的列擧にあるもの、如く想像せらるゝが、その分析的列擧の論難せらるゝ根原は、土屋氏が孤立的に各項目を検討せられたゝめである。併し乍ら氏が自ら解釋せらるゝが如くにかゝる項目は因果的關聯にあるのではなくて、有機的に綜合せる對立的關聯であるから、徒らに論難せらるゝ前に、一定の社會的素質が如何にして形成せらるゝか、之を理解するには如何なる方法によるべきであるかを一考せられたいのである。土屋氏も恐らく一定の社會には一定の社會素質の存する事は否定せられないであらう。而してその素質の構成を理解せんとすれば、單にマルキシズムの理論とか、辨證法的理論のみによつて一元的に歴史を説明し去る事は不充分であると思ふ。

土屋氏は折角多くの資料を蒐集せられたのであるから之を公刊して多くの人々の引用に便せらるゝ事は誠に

有り難き事であつて感謝に耐えない所であるが、願はくば、單なる資料提供者として了らすに、その得意とせらるゝマルキシズムの立場より之等の資料を綜合達觀して、百姓一揆の本質を究明し、不敏の余に高教を示され度い。中央公論誌の論文は單に事實の羅列にすぎずして、氏の結論を覗ふ事の出来ぬのは遺憾であるが、その末尾には、詳論は他日に譲る旨が約束せられて居るから、必ずや近い内に、氏の立場を明確に示し、百姓一揆の本質を闡明したる研究が發表せらるゝ事を確信する。之によつて徳川時代の百姓一揆の本質に關する問題、特に百姓一揆の革命性の有無の問題を解決するに有力なる傍證を得る事と思ふ。

尙ほ、最初にも述べたように、紙上の討論が長きに亘りて反覆せらるゝ時は却て研究を害するの虞あるが故に、この問題に關する論争は一應本稿を以て打ち切ることにする。文中或は禮を失するの言辭を弄した所があるかも知れぬが、この點は御寛恕を乞ふ次第である。又土屋氏の批判論文は中央公論誌上に掲載されたのであるから之に對する反駁も同一誌上に於てなさるべきであらうが、學問上の論争なるが故に特に本誌の紙面を借りた次第である。